

「一人の主婦のエルサルバドル内戦体験」

1976年秋、35歳の私はエルサルバドルに渡った。その後、私は1984年まで内戦下のエルサルバドルに8年間くらし、仕事で派遣されたわけではなく、全く個人的な目的であった。日本に来ていた国費留学生のエルサルバドル人と結婚し、主婦としての滞在であった。

それまで国名さえ知らなかった国での体験は覚悟が甘かったばかりでなく、内戦に巻き込まれた日常というのは、それはそれはすさまじい体験だった。しかし同時に内戦下で交流した現地の人々の無私の友情の感動的な体験でもあった。

内戦の間、私は自由に外に出られなかったため、家に閉じこもって内戦体験記を書き綴った。1984年、その内戦の記録を日本に持ち帰り、エッセイを書き起こしたが、出版費用がなかったため、発表できなかった。ところがその後、ゆえあって二科会で油絵を習う機会があり、経験した事実をもとに内戦関係の油絵を描き、二科展で発表したため、それがエルサルバドルの内戦の事実を人々に知らせる手段となることを発見した。50歳にして絵描きになったたった一つの理由が、エルサルバドルの内戦体験を人々に知らせることだった。特に今回列聖されたロメロ大司教の壮絶な説教を毎日ラジオを通して聞き、その殉教に接した出来事は、思い出す度に涙を禁じ得ない。



↑ 帰国後描いた絵、「大司教暗殺」（二科展に入選）右はその贈呈式：サンサルバドルの「大司教ロメロ記念館」に贈呈：この絵は暗殺25周年記念の写真集の表紙となった。

↓ 「一粒の麦の」。右は「一粒の麦の」贈呈式：ロメロ大司教暗殺現場の記念館に贈呈  
この絵は、2009年のカレンダーに採用された。



正直言って、8年暮らしたエルサルバドルを離れるのは悲しかった。エルサルバドル人は、私たちがどんな困難に遭遇しても、自分の危険を顧みず、助けてくれる精神を持っていた。

政府に追われ、逃げる一人の男を家族一族眷属が連携して助けあい、国境にたどり着いたところを、一族全員殺されたというニュースに接した時、私の感動は頂点に達した。日本なら、一族の安全を重視して、追われている家族の中の容疑者をおかみに差し出しただろう。

私たちも危険が迫ったとき、あるエルサルバドルの友人の家に逃げ込んだことがあった。自分の家族の危険をものともせず、その一家は私たちをかくまった。主人の友人の多くが国外に避難し、私たちも日本に行こうと画策したが、当時の法律に阻まれて主人に日本国ビザは下りなかった。主人は別のルートを探そうと、メキシコに行き、オーストラリアに難民申請をした。その時のオーストラリア大使館員の助けと、ある奇跡的な出会いによって主人の日本国ビザがメキシコの日本大使館から下りた。それを受けて主人は私たちより先に、一人で日本に行った。

その後、私は主人を追って帰国費用を作るため、エルサルバドルの当時住んでいた、レパルトロスエロエの家でガラージセールを始めた。手持ちの家具その他をすべて売りに出した時、近隣のエルサルバドル人と残留日本人が助けに集まってくれた。到底日本じゃ、売れそうにない着古したぼろ、履いていたズボンやしなびたスリッパに至るまで買ってくれたおかげで、旅費を作って帰国することができた。エルサルバドル脱出にあたり、死の危険にあった私たちにあれほどの手助けをしてくれた人々は、エルサルバドル人をおいて外にない。



↑は、義両親との別れ。娘が慕ったムチャチャと、近所の友達に送られ、1984年日本に向かって旅立った。優しいエルサルバドルの人々の心に、感動しながら、私たちは最後の時をがらんどうのレパルトロスエロエの借家で過ごし、日本に向かったのだ。

私は日本に帰国してから、本格的に絵描きになった。二科展入選を果たした後、エルサルバドルの体験を絵に表して発表することが、自分の義務と感じたからで、私があ国で内戦体験をしなかったら、50過ぎてから絵描きになるというようなことはなかっただろう。

私の人生にとって、全く未知の国の人物だったエルサルバドル人との出会いは、エルサルバドルの内戦とロメロ大司教との出会いという壮絶なドラマに遭遇するための神の意思であったとしか思えない。私にはあの体験を世に知らせる義務がある。詳しい内容を、amazonで「エルサルバドル内戦体験記及び回顧録」前編、中編、後編で発表しているので、ご興味のあるかたは覗いてくだされば幸いです。(特に前編に実体験が記されている)

前編

<https://ux.nu/2XsSy>

中編

<https://ux.nu/y1FDa>

後編

<https://ux.nu/xwmAN>

エスコバル瑠璃子（えずこばる るりこ）氏

1976年から1984年までの8年間、内戦下のエルサルバドルに主婦として滞在。内戦激化で帰国後、50歳より絵を学び、エルサルバドルの内戦体験絵画が二科展に入選受賞したのをきっかけに、絵を通して内戦体験を日本の人々に訴えようと考えた。その体験をエッセイ「エルサルバドル内戦体験記及び回顧録」で紹介している。